

都道府県別賞一等

最後の贈り物

宮城県 仙台市立折立中学校 三学年

遠藤 柚佳

それは、突然の出来事だった。母から「おじいちゃんが亡くなった。」という知らせを聞いたのは、今年の八月八日夕方のことだった。

その日の朝、いつもと変わらない様子で元気に家を出た祖父は、仕事の最中に雨で濡れた脚立から足を滑らせ、転落して亡くなってしまった。体の丈夫だった祖父が、こんなにあっけなく亡くなってしまふなど、とても信じられなかった。

祖父は、岩手の田舎町で造園業を営んでおり、庭石の加工や庭木を剪定する仕事をしていた。頑固だが優しい性格で地域の人々との交流も深かった。

私達孫のランドセルを買ってくれたのはいつも祖父だった。特に私は初孫ということもあり、一番かわいがってもらった記憶がある。毎年の誕生日には電話をくれた。また、祖父の家へ遊びに行くと、流しそうめんや釣りなど色々なことをして楽しませてくれたので、行くたびにわくわくしていた。

祖父の家へ向かう車中でも、まだ現実を受け入れることが出来ず、以前のように明るく迎えてくれるのではないかと思っていた。だが、やはりそれは叶わず、もう二度と祖父と会えなくなってしまうのかと実感し、寂しさでいっぱいになった。

その後営まれたお通夜にも、お葬式にも参列者が大勢おり、皆祖父との突然の別れを惜しんでいた。祖父はとても働き者で周囲からの人望も厚かったようで多くの人から愛されていたことがわかり、私は誇らしい気持ちになった。

無事にお葬式が終わり、ほっとしたのも束の間、祖父の仕事の書類を整理していた父が、ため息をついた。取引先などへの支払いが数多く残っていると聞いたのだ。

そのとき、一緒に作業していた母が生命保険証券を見つけた。祖父は生前から万が一のことも考えて生命保険に加入していたのだ。そのおかげで、取引先への支払いもできると両親が話していた。

私は今まで保険など難しくて、自分には関係のないものと思っていた。それに、自分が死んでしまったり、入院したときのことを考えるのは不幸なことだと思っていた。

しかし、今回初めて保険をとっても身近なものに感じ、万が一のことを考えておくことは、遺された人達のために大切なことなのだということを学んだ。

## 第54回中学生作文コンクール

母も、弟を帝王切開で産むときに生命保険のお世話になったと言っていた。関係のないものと思っていた生命保険も、関心を持つてみるとすぐ身近なものに感じた。そして、生命保険は自分のためだけでなく、家族のためにも必要なものなのだということがわかった。

自分にもしものことがあったとき、皆に迷惑をかけまいと以前から備えていた祖父は改めてすごいと尊敬した。

生命保険は、服や食べ物とは違って形がなく、お金を払っても何か「モノ」を得られるわけではない。しかし、事前に備えておくことで、亡くなったり入院したりしたときに、「ありがたみ」や「重み」となって伝わってくるのだと思う。

今回のことで、改めて祖父の優しさをひしひしと感じた。

生命保険は、遺された家族が困らないようにという祖父の思いやりや愛情がたくさん詰まった私達家族への最後の贈り物なのではないだろうか。

私達も、万が一のことから目を背けず、しっかりと向き合い、愛する家族のためにも元気なうちから備えておくことが大切だと思う。